

单刀直入

ソーラーカー・レース

パリダ力優勝、清里在住 篠塚 建次郎さん(64)

温暖化懸念、ギネス挑戦

——北杜市高根町清里に住んでいますね。

元々、女房（俳優三浦友和さんのお嬢さん）の父親（市ひろ子さん）の元親（報道車が多いところへ）。た。86年、「次は日本人」と自分に白羽の矢が立ち、87年総合3位。帰国すると成田で

は今の甲州市塙山で警察官だった。その後、女房の両親が清里でベンションを始め、女房が手伝うことになった。僕は金曜日の夜に清里に戻り、月曜の朝、都内に向かう生活。還暦を過ぎ、山の生活もいいかなと移りました。

清里でベンションを始めた。パジェロが月3千台、モータースポーツで初めて車が売れたと思ひます。97年に念願の優勝を果たしました。

——2000年にパリダカで手と足の骨が折れる大けがをしました。

だ走ると平行線をたどつて、本社に辞表を書いた。――03年のパリダカは日産車に乗りましたね。

結果を出そうと無理をした。砂丘で転倒、顔や手足を骨折し重体に。翌年は契約してもらひえず、フランス日産から出たが、車が炎上した。その後もプライベートでも出た。そして08年、「テロリストが襲う」とレースが中止に

つくれるなら。物見遊山の学生に雪を落として、戦う態勢に変わり優勝できました。

――東海大とレースで優勝を重ねた後、昨年チームを別につくりました。

温暖化への懸念が高まる今、真剣に開発すれば一生をかけた仕事になる。でも、学生は年1回の遠征がやっと。市販に向けて催事などやりた

「ラーカーの有力校だつた。秋に南アフリカで1回目のソーラーカーレースがあるが、治安が悪く、参加を決めかねていた。「危ない人は日本でモーる」というと、一緒に行

「優秀なサラリーマン」に背を向けて戦った姿に、ぐっとくる。

日照時間の長い北杜市に住みソーラーカーと出会ったのは偶然でなく、広げたアンテナにかかるべくしてかかったのだ。置かれた状況で常に前向き。5月、奥さんと一緒に再開するパンションには自分を見つめ直したいときに訪れない。(渡辺嘉三)



しのづか・けんじろう 1948年、東京都生まれ。東海大入学後にラリーを始め、三菱自動車入社。8年間のランクの後、86年、世界一過酷と言われるパリ・ダカールラリーに参戦し、97年総合優勝。2008年以降、レースや催しでソーラーカー普及に努める。

「状況」に常に前向き

レースでチームをまとめるコミュニケーションや管理能力、見えない砂丘の先に向けて、一か八かの勝負をかける孤独な決断力。ラリードライバーとしての契約ではなく、社員となり、28歳から8年間、最も脂ののっていた時期にレースに出されな

くても腐らず、復帰の時期を待った
粘り強さ。だが、目の前の篠塚さんは、静かで優しい。

パリダカのような数週間のマラソンレースと2~3日でスピードを競うレース、両方で活躍する人はまずいないという。「そこはちょっと誇らしく」と話すときを難かが

50歳を過ぎても現役にこだわり、